

全校体制で推進する人間関係づくりを核とした社会性の育成 —SGE を中心としたカリキュラム開発・組織づくりを目指して—

平出 久美子（平成 29 年度教育実践コース修了）

I 問題と目的

近年、少子化・核家族化など子どもを取り巻く環境が変化し、学校以外で集団行動を体験する場や、地域との関わりなどの生活体験をする場が減少している。人との関わり方を身に付ける機会の減少と体験不足は、集団の中でよりよい人間関係を形成することができず、いじめや不登校、学級崩壊、犯罪の低年齢化など様々な問題を引き起こすことにつながっている。また、第 38 回教育再生実行会議資料「日本の子供たちの自己肯定感が低い現状について」（2017）では、日本の高校生は中国・アメリカ・韓国の高校生と比較すると、「自分には人並みの能力がある」「自分自身に満足している」という割合が低く、「自分はダメな人間だと思ふことがある」という割合が高いことが指摘されている。子どもたちの自己肯定感を高めると共に、社会性を身に付け、人間関係を学ぶ集団の場として、一日の大半を過ごす学校や学級の果たす役割は重要である。

筆者がこれまで担任した児童の中には、よいかかわり方が分からずに友達を傷つける言動をしてしまう児童や、人とかかわりたいという意欲に乏しい児童など、社会性が欠如していると感じられる児童がいること、自分に自信がなく発言をためらう児童がいることに問題意識を感じてきた。

平成 29 年度、自校の心の教育の重点として「社会性の育成」が掲げられた。社会性育成主任の職務が校務分掌に新設され、筆者は主任としての役割を担うことになった。

そこで、自校の心の教育で大切にされてきた人間関係づくりを核とした、社会性の育成を目指した取り組みを実施することにした。

II 方法

社会性の育成を目指し、以下の 4 点を中心に実践した。

1. 「社会性育成のためのカリキュラム」の作成

自校の生徒指導上の教育課題を、児童の実態、教師の実態から把握した。課題となっている「自己肯定感」「人間関係形成能力」の向上を目指すことにした。徳育部の重点である人間関係づくりを充実させる為、ふれあいと自他発見を目的とした構成的グループエンカウンター（以下 SGE）を中核とし、対人関係や集団行動をよりよく営むためのソーシャルスキル教育（以下 SSE）、自治的な学級集団を作ろうとする力を育てる話し合い活動を計画的に実施することで、児童の社会性の育成をねらう。資料 1 のように「社会性育成のためのカリキュラム」を作成し、実践した。

1) 社会性を育成するための手だて（図 2）

a. 学校行事と関連させ、基本的自己肯定感を育てる

体験と感情を共有することで育つ（近藤, 2013）とされる為、学校行事と関連させた活動を位置付けた。感情と体験を共有し、人とかかわる喜びを味わい、活動後に SGE を実施する計画を立てた。普段見られない友達の肯定的な一面を伝え合い、自分や友達の新たな一面に気付くことができるようにした。他者との比較ではなく、絶対的な感情であり、自分の良い点だけでなく、欠点も含めありのままを受け入れる自己受容の感情である、基本的自己肯定感を育てる（図 2-※1）。

b. 学級で友達に認めてもらい、社会的自己肯定感を高める

学級で、友達とかかわり合う活動（SGE）や人とかかわり方（SSE）を体験したり、自分の学級をよりよくするための話し合い活動を実施したりする計画を立てた。自分からかかわることができた喜びを味わうことができるようにした。活動を通して、他者からよさを見付けてもらい、自分に自信をもつことで、他者との比較による相対的な優劣による感情である、社会的自己肯定感を

高めていく（図2-※2）。

c. 縦割り活動と関連させ、自己有用感を高める
縦割り班活動で、他学年との遊び（あおぞらタイム）や、全校登山後のSGE等を通して、人の役に立つことができた喜びを味わうことができるようにした。自分と他者との関係を自他共に受け入れる感情である、自己有用感を高めていく（図2-※3）。

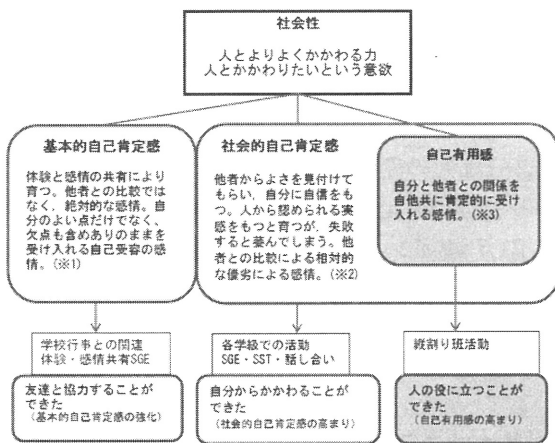


図2 社会性を育成する手立て

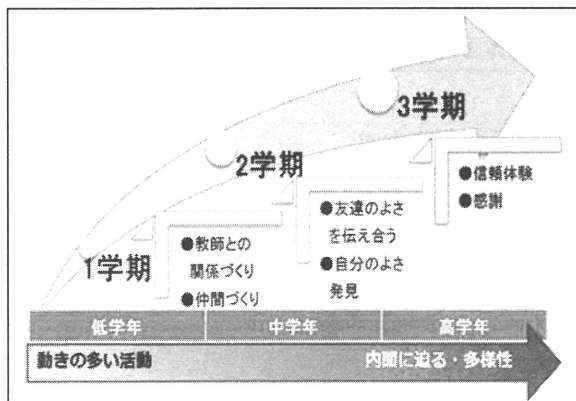


図3 学年の発達段階と学期の系統性

2. 計画的・系統的なSGEの配列

人間関係づくりの活動を全校で実施するにあたり、年間を通して、社会性が生まれ、友達との関係性が深まるよう、実習での実態を基に系統性をもたせて活動計画を立てた。徳育部の重点として、実施されてきたSGEを核とした年間の系統性については、学級開きでは、教師との関係づくり、1学期は仲間づくりの活動、2学期は友達のよさを伝え合うことで、自分のよさに気付く活動、3学期は1年間共に過ごした仲間との信頼体験や感謝を伝え合う活動へと計画した（図3）。学年の発達段階に応じ、低学年は動きのある活動を多く

取り入れ、高学年に向けて内面に迫る活動や多様性を認め合う活動を位置付けた。6年生は、総合的な学習の時間に実施しているキャリア教育と関連させた計画を立てた。また、校内研修での教職員からの提案により、1年生の1学期は、学校生活に慣れず不安定な児童が多いため、幼保小連携のためのスタートカリキュラムとしての活動を位置付けた。学級の実態や児童の発達段階に応じ、意図的・系統的に活動を実施することで、社会性を育成する。

3. 活動の振り返りを評価し、改善するシステム

活動案とワークシートを作成し、学校の共有フォルダに保存することで学級の実態に合わせて項目を変えたり、内容を訂正したりして、必要に応じていつでも活用できるようにした。また、実施後の児童・教師の感想や、活動時の児童の様子を基に、内容の修正・改善を行うPDCAサイクルで活動を進めた。児童のワークシートからは、一人一人が充実した活動になっているかを見取った。児童の振り返りシートからは、自己理解・他者理解がどのように深まったのか、どのような感情で活動していたのかを見取った。担任の振り返りからは、活動の意図が子どもたちに伝わったか、子どもたちを客観的に見ての感想、ねらいが達成したか等、有効な点や改善点等を見取った。活動の改善点や担任自身の指導の反省点等については、改善策を検討し、次年度に生かすようカリキュラムを修正していく。

日常生活での社会性の変容を見取り、「社会性育成のためのカリキュラム」の効果を検証する目的で、活動後、1週間程度時間を空けて「人間関係尺度チェックリスト」のアンケートを毎月全学級に実施した。

4. 全校体制での取組

校内研修で検討した活動案、ワークシート、児童の振り返りシート、担任の振り返りシートをセットにして、毎月学級担任に提示した。学級で困っていることや、支援を要する児童について話し合い、実態に合わせて効果的な活動になる方法を担任と共に考えた。また、計画以外にもその時期に推奨する活動も提案するようにした。毎月アンケートを実施した「人間関係尺度チェックリスト」は、データをグラフ化し学級全体の傾向を担任が把握できるようにした。個人データでは、誰がどの項目に否定的な回答をしているか、支援を

要する児童を一目で把握できるよう、色分けして担任へフィードバックし、学級経営や児童理解に生かすことができるようにした。

5. 生徒指導部と連携した校内研修の実施

校内研修では、生徒指導部と連携し、前年度はSGEワークショップと、全校での実施に向けた目的の共有や活動案の検討をした。今年度はQ-Uを活用した学級経営の研修を2回実施した。実際に人間関係づくりを体験したり、Q-U結果から学級全体と、個へのアプローチについて学年部で話し合ったりし、即実践に生かす内容にした。研修後、学級でQU結果を活用し、児童による話し合いを実施したり、チームで支援したりして、学級経営に生かすことができた。また、全校で実施するにあたり、活動の意図や目的を教職員で共通理解を図ることができた。校内研修の教職員の感想から、意識向上、本質的理解につながったことが分かった。

Ⅲ 結果

1. 人間関係尺度チェックリストの推移

全校児童を対象に毎月実施した「人間関係尺度チェックリスト」の中から、「自分にはいいところがある」(図4)、「自分にはいいところがある(自己肯定感)」(図4)、「自分にはいいところがある(自己有用感)」(図5)の推移は以下の通りである。

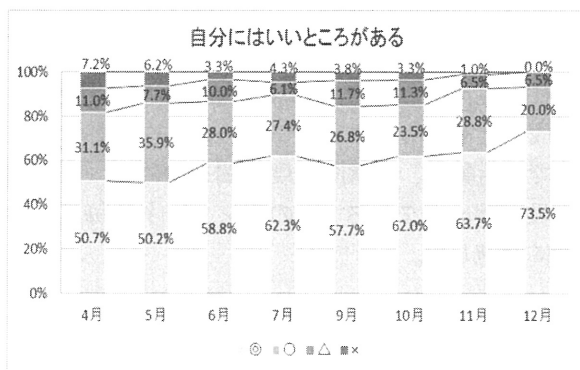


図4 「自分にはいいところがある」の推移

「自分にはいいところがある」では、肯定的評価をしている児童が4月81.8%から12月93.5%へ、11.7ポイント増加した。さらに、「とてもあてはまる」と回答している児童が4月と比較して12月は22.8ポイント増加している。継続した取組により、自分のよさを実感している児童が毎月増加している。

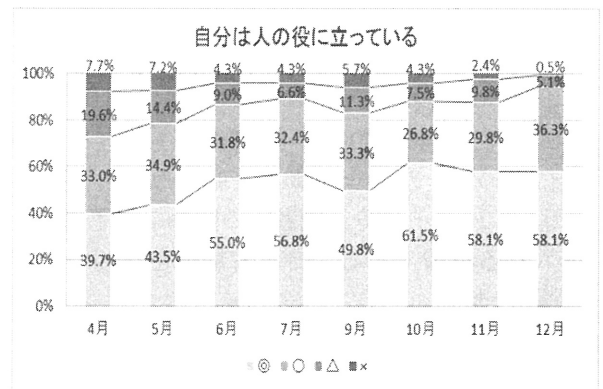


図5 「自分は人の役に立っている」の推移

「自分は人の役に立っている」では、4月72.7%から12月94.4%へ、肯定的評価をしている児童が21.7ポイント増加した。縦割り班活動と関連させた活動を計画的に取り入れ、活動後に振り返り、互いの頑張りを認め合ったり、感謝し合ったりする中で、自己有用感が高まったと考える。

2. 基本的自己肯定感と社会的自己肯定感の推移

ありのままの自分を受容する基本的自己肯定感と、他者との比較による相対的な社会的自己肯定感の推移は以下の通りである。

表1 基本的自己肯定感と社会的自己肯定感の推移

	4月	7月	12月
社会的自己肯定感	42.5	49.8	49.9
基本的自己肯定感	52.0	52.5	54.2

基本的自己肯定感は、4月52.0ポイントから、12月54.2ポイントへ、2.2ポイント増加した。ありのままの自分を受け入れる心が、少しずつ育ってきている。

社会的自己肯定感は、4月42.5ポイントから、12月49.9ポイントへ7.4ポイント増加した。他者との比較による優劣が反映される為、継続した取組が必須である。

3. hyper-QUの推移

5月と11月に全校で実施したhyper-QUの推移は以下の通りである。

表2 hyper-QUの推移

	5月(%)	11月(%)
満足群	68	79
非承認群	13	10
侵害行為認知群	9	7
不満足群	10	5

